11月の防除のポイント

令 和 ８ 年 10月 21日
東 京 都 病 害 虫 防 除 所

主な作物の病害虫防除について、お知らせします。

＜露地野菜＞

〇細菌性病害（軟腐病、黒腐病、黒斑細菌病等）

10月の巡回調査では、アブラナ科野菜において細菌性病害は一部地域のブロッコリーで確認されました。これらの細菌病は害虫による食害痕や傷口等から病原菌が侵入し、風雨等により感染が拡大します。特に軟腐病は多くの作物に感染します。いずれも病気の進展が早く、発病後の防除は困難な場合が多いため、注意が必要です。

防除指針を参考に予防散布に努めるとともに、葉裏や地際部等もよく観察し初発を見逃さないようにしましょう。また、発生を確認した圃場では、雨の日に管理作業・収穫作業を行わないようにしましょう。



図１　株元の軟腐病の病徴(ハクサイ)



図２　軟腐病の罹病株（キャベツ）

＜施設イチゴ＞

〇ハダニ類及びホコリダニ類

この時期最も重要な害虫はナミハダニやカンザワハダニ等のハダニ類です。ハダニ類は葉裏に生息しますが多発すると葉表にもかすり状の被害が確認できます（図３，４）。本圃におけるハダニ類の発生源は苗からの持ち込みと周辺雑草からの移入ですが、この時期の防除が不完全だと後から大変苦労します。マルチ設置後は内部にハダニ類が逃げ込むため防除効果が低下しますので、設置前に徹底防除しましょう。また、ハダニ類にはカブリダニ類やハダニバエ等の有力な天敵が存在するため、できる限り天敵に影響の少ない剤を選

択することも重要です。12月になるとハダニの侵入はほとんどなくなります。11月までの防除を徹底することで、収穫最盛期の防除作業が軽減されます。

ハダニ類以外の害虫ではホコリダニ類が要注意です。葉が深緑色に変色し、ねじれなどの変形が確認された場合は、本種の発生を疑いましょう。ホコリダニ類はハダニ類よりさらに小さいため、肉眼での発見は困難です。芯葉部を好むため殺虫剤が届かないことがあります。発見した場合は丁寧な散布を心がけましょう。

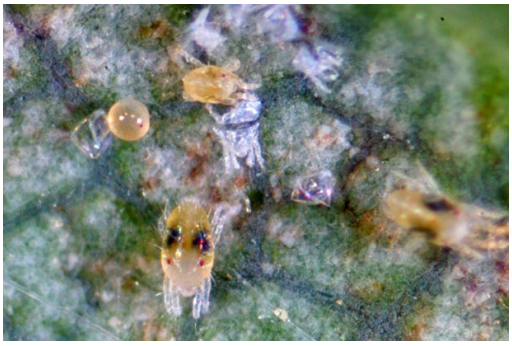




図３　ナミハダニの卵、幼虫、成虫　図４　ナミハダニによるイチゴの被害

＜施設トマト＞

〇タバココナジラミ

今後、タバココナジラミの外部からの侵入は少なくなるため、施設に生息する個体の防除が中心となります。今までは成虫侵入対策が防除として重要でしたが、今後は幼虫に対し効果の高い殺虫剤も併用し、施設内の防除の徹底を目指しましょう。

＜施設野菜・花き＞

〇うどんこ病

10月の巡回調査では、一部の施設キュウリでやや多く発生が確認されています。今後、施設栽培で発生が多くなり、昼夜の温度差が大きいと発生が拡大するため、注意が必要です。発生を認めたら、速やかに発病葉、発病株を除去し、施設外に持ち出します。病状が進むと防除が難しくなります。防除指針を参考に予防も含め、葉の表裏に薬剤散布を行いましょう。

〇灰色かび病

施設栽培において灰色かび病が発生する時期となってきました。環境条件は20℃前後で曇天・多湿が続くときに多発します。そのため施設内が過湿にならないように、適度な換気を行いましょう。また、茎葉が過繁茂にならない

ように、適正な肥培管理を行うようにしましょう。発生を認めたら発病部位を除去します。合わせて、防除指針を参考に予防も含め、薬剤散布を行います。その際、同一系統の殺菌剤を連用すると薬剤耐性菌が発生し防除効果が低下する恐れがあるため、ローテーション散布に努めましょう。

上記以外の病害虫についてのご相談は、電話（042-525-8236）又はＥメール（S0200303@section.metro.tokyo.jp）にてお問い合わせ下さい。